

# 田植歌謡「小栗判官」ナガレ考

— 説経・絵巻等との比較をめぐって —

竹 本 宏 夫

田植歌謡の中には「小栗判官」を歌ったものがある。「熊野地方の民謡」(白田甚五郎博士、徳江元正氏、国学院雑誌六四号二・三号所収)には、「田植歌」として、

咲いた花より咲く花よりも、咲いて乱れた花がよい。咲く花よりも、咲いて乱れた花がよい。

咲いて乱れて、また咲く花は、小栗判官照天姫。また咲く花は、小栗判官照手姫。

小栗判官、照手の姫は、殿のためにと車曳く。照天の姫は、殿のためにと車曳く。

殿のためにと、車を曳けど、ためになるやらぬやら。車を曳けど、ためになるやらぬやら。

右の四節が紹介され、その「注」によると「田植歌も、新しいものなら他にもある由だが、古いものはこの四節に限り、曲節には口伝があるさうだ。」というふうに、これが古い田植歌であることが報告されている。一方、同じく「小栗判官」を主題とした田植歌が、中国地方にもみられる。備後、備中一円の田植歌本に書き留められているもので、いわゆる、説経節などにみられる「小栗判官」

の物語を、叙事的に歌いあげていくものである。現時点で、十二本の田植歌本にみられるが、これに展開上二型あり、一つは単に物語を展開していくものであり、いま一つは「月歌」の形式で展開していくものである、当稿では、前者の単に物語を展開する系統を対象とする。諸本間の詞章を整理して、その全体を示すと、次のようである。(各詞章末の数字は上部が私に付した諸本の整理番号、下部が排列の位置を示す数字。なお諸本の番号は「伝承文学研究昭和四十一年八号」所収の「田植歌謡大山登りナガレの整理」の場合に準ずる。)

- 1 常陸では月が小栗に日は照 照ててい女の物語り (6 (1))
- 2 小栗さん四拾に近い身を持ちて 妻子がないのがいとをしや (21 (1))
- 3 小栗さん妻子のないのを氣にかけて 妻子に焦がれて身をやつす (21 (2))
- 4 小栗さん四拾になりても妻がない 都の商人あき手引きする (21 (3))
- 5 商人が小栗の書きしその文を 千駄荷物ちまたの底に入る (6 (3))

商人は小栗の書いたるその文を 千反荷物の底にある

(21 (4))

6 商人が常陸の国を立ちのいて 相模の国に急がれる (6 (4))

商人は常陸の国を後にして 相模の国へ急がれる (21 (5))

商人は文手に持ちて急がれる 相模の国へと急がれる

(30 (5))

7 商人が相模の国になるなれば 横山さして急がれる (6 (5))

商人は相模の国となるなれば 横山さして急がれる (21 (6))

8 商人が横山門を眺むれば 男きんでの札がある (6 (6))

9 商人が横山はいる計り事 女きんずの札をかけ (6 (7))

10 商人が横山内にはいるなら 照手の姫を計り事 (6 (8))

商人は横山入るにはかり事 照手の姫も計り事 (21 (7))

11 照手姫色にはおちねどいとをしや 墨すり濁して文を書く (6 (9))

12 商人は照手の書きしその文を 千駄荷物の底に入れ (6 (10))

13 商人が相模の国を後にして 都をさして帰られる (6 (11))

商人は相模の国を後にして 先ず京都に帰られる (21 (9))

14 商人がその文小栗に渡すなら 三千石の知行もらう (6 (12))

商人はその文小栗に渡すなら 三千石のちぎもらう (21 (10))

15 小栗さん四拾になりて初妻 京なる商人縁を組む (6 (13))

16 小栗さん文封をきり手持ちて 二つ文句を読みくだす (6 (14))

小栗さん文封をきり手に持ちて 色々文句を読みくだす (21 (11))

17 我が殿は常陸の国では小栗さん 横山長者の照手さん

(30 (1))

18 小栗さん親御は誰かと尋ねれば 不動の神が親御なり

(30 (2))

19 小栗さん屏風の影で何をする 照手にやるとの文を書く

(30 (3))

20 小栗さん文なる使ひ誰がする 後藤左衛門商人よ (30 (4))

21 商人が横山長者の門口に門番に 紅扇をこころざし (30 (6))

22 商人は門から内へ入り込んで文を出す 十二の下女が手にとりて (30 (7))

23 照手さんその文手にとり見給はば その文いちいち読み下し (30 (8))

24 小栗さん大海々と書くなれば 思ひが深いとこれを読む (6 (15))

小栗さんかいこうみよと書いたのは 思ひが深いとこれを読む (21 (15))

その文に近江の海と書いたのは 思ひが深いとこれを読む (30 (9))

25 小栗さん戸板にあられと書いたのは ころびあおうとこれを読む (6 (17))

その文に戸板に載と書いたのは ころびあおうとこれを読む (30 (12))

小栗さま戸板に嵐と書いたのは ころべあうやとこれを読む (42 (5))

26 小栗さん丈長帯と書くなれば 結びあおうとこれを読む

(6 (16))

小栗さん丈長帯と書いたのは 結びあおうとこれを読む

(21 (14))

その文に尺長帯とも書いたのは めぐりあおうとこれを読む

(30 (14))

小栗さま尺長帯と書いたのは めぐりあうやとこれを読む

(42 (8))

27 小栗さん袂に氷と書くなれば しんとけあおうとこれを読む

(6 (18))

小栗さん袂に氷と書いたのは しみとけあおうとこれを読む

(21 (17))

小栗さま袂に氷と書いたのは 解かしあうやとこれを読む

(42 (7))

28 小栗さん小池にかもめと書くなれば 引手になびけとこれを読む

(6 (19))

小栗さん小池になかもと書いたのは 引出来なびけとこれを読む

(21 (16))

29 小栗さんふたまた川と書いたのは 流れあおうとこれを読む

(6 (20))

その文にふたまた川と書いたのは 末落ちあおうとこれを読む

(30 (13))

30 小栗さん時計の計と書くなれば めぐりあおうとこれを読む

(6 (21))

31 その文に富士なる山と書いたのは 位が高いとこれを読む

32 その文に小笹に葎と書いたのは あたれば落ちるとこれを読む

(30 (11))

33 小栗さま丸形橋と書いたのは 踏みかやされなとこれを読む

(30 (11))

34 小栗さま森木に風と書いたのは 人目を忍べとこれを読む

(42 (3))

35 小栗さま小笹に露と書いたのは 引くになびけとこれを読む

(42 (4))

36 小栗さま沖に出船と書いたのは 便りがないとこれを読む

(42 (6))

37 照手さん一々読んで見たれども やれやれかなしやくい破る

(42 (9))

38 照手さん文なる返事はするほどに 返事を手にとり帰られる

(30 (15))

39 小栗さんみだてもせずと急がれる 横山長者の押し婿

(30 (16))

40 小栗さん茅野が原へと急がれる 鬼鹿毛馬にと下馬をする

(30 (17))

41 小栗さん鬼鹿毛名馬をほめなさる 前ひざ折りて下馬をする

(30 (18))

42 鬼鹿毛は御目のかかりを見たまへば 明星星と拝まれる

(30 (19))

43 鬼鹿毛は口なるかかりを見たまへば わに口などにと見えた

(30 (20))

まえ

(30 (21))

44 鬼鹿毛はおがみのかかり見たまへば 清水滝にと見えまする

(30 02)

45 小栗さん馬乗りかけて行く折りは 横山長者の門口に

(30 02)

46 小栗さん馬乗り上手と聞こえたり 屏風のふち乗りいと安い

(30 04)

47 兼氏は毒なる薬をする折りは 小栗を殺そうと毒薬

(30 02)

48 小栗さん毒なる薬ではてなざる 生まれ変わり待つばかり

(30 02)

49 小栗さん豊後の湯つばに行く折りは かきやみ車に乗り替え

(30 02)

50 小栗さんかきやみ車を引く折りは誰が引く 我が身の菩提と

(30 00)

51 小栗さん病気だんくよくなりて うち喜んで照手さん

(30 01)

52 小栗さん照手に向かひ物語り 昔のことをうち忘れ

(30 02)

53 小栗さん常陸の国の君なれど 吹きくる風もなつかしや

(30 03)

54 照手さん相模は妻の国なれば 今日吹く風もおそろしや

(30 04)

55 小栗さん横山長者に婿入りて 七日あるのを選ばれる

(21 01)

56 小栗さん婿としゅうとの対面に 鬼鹿毛乗れよと好まれる

(21 02)

小栗さま婿にしゅうとの対面に おんかけ見せよと頼まれる

(37 06)

57 小栗さん鬼鹿毛駒をなびかせて 五番の目塗りにしゅうぎの

(21 03)

58 小栗さん梯子の右乗り左乗り 立てたる障子のくみここのり

(21 04)

59 小栗さん千疊敷にすわらせて 毒酒の酒で身をやつす

(21 05)

60 小栗さん毒酒を持ちて毒害に 照手の姫も下流し

(21 00)

61 いたばしや照手の姫が水汲めば 汲みたに水でかけを見る

(8 11)

いたはしや照手の姫が水を汲む 汲んだる水でかけを見る

(13 11)

62 いたばしや照手の姫がかげを見る 我が身にちどいろあれば

(8 02)

いたはしや照手の姫がかげを見る 我が身に人空白

(13 02)

63 水を汲む汲んだる水でかけをとる やつれ果てたる我が身な

(21 02)

清水汲む汲んだる清水でかけをとる やつれ果てたぞ照手姫

(29 09)

清水汲み汲みたる清水でかけをとる やつれ果てたる我が身

(37 12)

64 いたばしや照手が姫は車引く 一引き引けば夫のため



ばれる、やはり異型である。排列は整理して三つに区分して示した。諸本は、主題の「小栗判官」を歌う点では共通するのであるが、具体的な詞章に注視すると、或るいは類似するもの、或るいはそうでないものと、複雑である。類似詞章は一処に扱い、また物語の展開を考慮して、右のような排列をした。~~~~~線区分は、諸本を整理するにあたって生じた、例えば筋の展開のめやすなどを示そうとしたものである。

さて、当稿では、これらの詞章を、「小栗判官」関係書では最も古く、室町期から江戸期にかけての「をくり絵巻」〔絵巻〕〔桂宮本叢書第十七巻所収〕・「おぐり判官」〔延宝説経正本〕・「おぐりの判官」〔説経正本〕・「おぐり」〔奈良絵本〕・「おぐり物語」〔草子〕・「をくり」〔古活字版〕（以上、説経正本集第二所収）と比較して、田植歌謡の「小栗判官」が、これら関係書の面影をどのように伝承しているかを考察しようと思う。

## 二

右にかかげた田植歌の詞章であるが、これは、冒頭の歌い出しの一声を置いて、小栗と照手姫との結び付きから始まる。1は、月が小栗で日は照手である。これに関して、「延宝説経」ほかには、商人が照手姫を説明するところに、

さん候是よりさがみの国のぢう人。よこ山殿と申に。男子五人持給ふ。おとにひめがほしいとて。しもつけの日光山にきせいをかけ。姫君の候。すがたは秋の月、じつはらとをのゆびさき迄。るりをのべたるごとく也。則御名をてる日月をかたどりて。てるてのひめと申也。

とある。小栗はみられないが、かような部分が冒頭の一声にかかわ

ているように思われる。2・3・4は、四十歳になっても妻子のない小栗が、身をやつし、都の商人が手引きをする。この部分は、「延宝説経」その他に、商人に酒をふるまい、

いかにあき人此やかたに、いまださだまる御せんなし。御中立を仕れ。あき人承り、……此姫君（照手姫）を御むかへ取らせ給へと、べんぜつあらし申ける。池のせうじ承り。君にかくと申けり、はや見ぬ恋にあこがれて。あき人なかうど仕れ。あき人承り、

とある。年令については、別のところで「四十二さいの御年まで」などとある。5・6・7・8・9・19・20・21・22は、小栗は文をしたため、商人である後藤に託すと、商人はその文を干駄荷物の底に入れ、相模の国の横山をさして急ぐ。横山郷には入るを禁ずる札があるが、紅扇を志として入り込む。この部分に関しては、先の引用文に続いて、

それがしかやうのいやしき身にて、中立とはおそれおほき事なれど。一ふで召れ候は。御文のつかひを申べし。君なぐめに思召。りやうしすゞりを召れ。思召ことのはを。さもじんしやうにあそばして。あき人に下さる。ご藤玉づさ請取。つゞらのかげごとおさめ。れんじやく取てかたにかけ。さがみの国へといそぐに程なく。よこ山たちに成ぬれば、てるての御所、いぬいのつぼねをあきなふてとをる。

とある。また、この部分について「奈良絵本」には、

なふいかにをくりさま、……、御ふみ一つうたまはれや、をくりと、けてまいらせん、をくりとはきこしめし、なのめならすにおほしめされ、そのきにてあるならば、ふみをまいらすへ

きそ、よきにとゞけてくれさいや、ことうさゑもんとこそお申  
ある、ことうさゑもんは御ふみうけとり申、つゝらのかけこに  
とうといれ、おまへをまかりたちければ、……、れんちやくつ  
かんでかたにかけ、ひたちのくにをうちいつる。やう／＼いそ  
きけるほどに、こゝははやよこ山との／＼にとかや、もんくわ  
いにつつといる、はんのものはこれを見て、此うちへはたひの  
ものはきんせいなり、とをすましいとをしとゝむ、あき人此よ  
しきくよりも、れんちやくとうとおろしをき、あぶき百ほんつ  
ゝらよりとりいたし、はんの人々に、ときのけいふつとてそま  
いらせたる、はんの人々申やう、かたくきんせいで、御ふた  
のおもての候へとも、あき人なれば、おとをりあれと申ける、  
とある。この部分には、類似は面影にとどまらず、具体的な詞章間  
においても、その指摘できるものがある。また、とくに「奈良絵  
本」の方には、商人が禁制の横山門を入るにあつて、門番に扇を  
心付けとする部分があるが、この点は田植歌の方にもあり、とくに  
「奈良絵本」・「田植歌」との関連がうかがえる。10・11・12・13  
・14・15・16・22・23・37・38とかかげた詞章は、後藤商人が横山  
邸に入つてから、照手姫の便りを持って小栗の許へ帰ってくるまで  
を歌つたものである。横山邸に入った商人は、照手姫をはかり事に  
かける。小栗の手紙をまず下女が受けとり、やがて照手姫が読む  
が、すかされたと知つた姫はその便りを破る。が、結局姫は小栗へ  
の返事をしたため、商人はそれを持って小栗の許へ帰り、渡すと、  
小栗はそれを読むというものである。この間に文の内容である「や  
まことば」があるが、照手姫が小栗からの便りで読む体裁になつ  
たものと、小栗が照手姫からの返事として読む体裁になつたものと

の二系が、田植歌にはみられる。「やまとうた」については、と  
くに次頁でとりあげる。)さて、この部分は諸本ともに大体一致す  
るが、「延宝説経」で示すと、先の引用文に続いて、

てるての御所、いぬいのつばねをあきなふてとをる。女房達は  
出給ひ。あき人を召れ。ことうつゝらをおろし、しな／＼を取  
出し。……。ご藤時分を見て。彼文を取出し。此門外にてひろ  
い申て候。よくは手本。あしくはとうぎのわらひぐざになされ  
よと。たばかり文を参らする。女房達は請取。さつとひらひて  
見給ひ。何上成は月か星か。下成は雨あられとかゝれたり。何  
様心きやうきの人か。若有事をすぢなきやうにかきなしたり  
と。一じをもわきまへず、一とにとどつとぞわらひける、てる  
て此由聞召。ゆるぎ出させ給ひつ□。何をわらはせ給ふぞや。  
おもしろきことあらば。ひめにも語りなぐさめて給はれ。女房  
達と申さるゝ。女房達は承り。彼玉づさを奉る。……へやまと  
詞を読む)……。おく迄よふで何かせん。爰に一しゆのことが  
き有。恋する人はひたちのおぐり。こひられ人はみづから也。  
今迄は我身の上としらずして。よふだることのはづかしや。若  
此ことが父上。あに殿原に聞へなば。みづから何と成べきと。  
二つ三つにくひさき引きさき。みすよりそとへふはとすて。れん  
中ふかく入給ふ。

とある。ここにおいて商人、照手姫に向かつて、文を破り、その上  
に返事をしないことの罪業を申し立てる。続いて、

此こと父へもれ聞へ、みづからしざいに及ぶ共。ふみの返事を  
申さんと。うすよう一かさねに、おぼしめすことのはを、じん  
じやうにあそばし、あき人に給はりけり。後藤玉づさ請取。つ

ゞらのかけごにどうど入。れんじやく取てかたにかけ。……。  
ひたちをさして急けり。程なくひたちになれば。御返事をさし  
上る。

とある。14には、商人が照手姫からの返事を小栗に渡し、三千石の  
知行を貰うとあるが、この点は「ご藤おいとま申けり。引出物にし  
や金百両。まき絹百疋給はり、本国へ帰りける。」(延宝説経)と  
か、「それく商人に引手ものとりせよ。畏て候と。数の小袖を下  
さる。後藤よろこひわがやをさしてそ帰りける。」(説経)など  
とあり、三千石の知行ではないが、この部分が該当する。

ここで、文面の「やまとことば」について述べる。24から36まで  
十三種類の「やまとことば」をかかげたが、この田植歌謡「小栗判  
官」ナガレにみられる「やまとことば」は、「絵巻」・二本の「説  
経正本」・「奈良絵本」の中に見ることが出来る。「絵巻」は、小  
栗が照手姫に宛てた文を、商人が仲介し、それとも知らぬまま姫が  
下女たちに読んで聞かせるところに、次の十一種の「やまとこと  
ば」が登場する。

1 ほそたにがはの、まるきばしともかゝれたは、このふみ、ち  
うにて、とめなまで、おくへとをひてに、へんじ申せとよも  
ふ、  
2 のきのしのぶとかゝれたは、たうちうのくれほどに、つゆま  
ちかぬるとよもふ、

3 のなかのしみづとかゝれたは、このこと人にしらするな、こ  
ころのうちで、ひとりすませとよもふ、

4 おきこぐふねともかゝれたは、こいこがるぞ、いそひでつ  
けいとよもふ、

5 きしうつなみともかゝれたは、くづれて、ものやおもふらん、  
6 しほやのけぶりとかゝれたは、さてうらがふくらば、一や  
はなびげとよもふ、

7 しやくないをびとかゝれたは、いつか、このこひじやうじゆ  
して、むすびあふとよもふ、

8 ねざゝにあられとかゝれたは、さはらば、おちよとよもふ、

9 ふたもとすゝきとかゝれたは、いつか、このこひ、ほにいで  
ゝ、みだれあふとよもふ、

10 みつのおやまとかゝれたは、申さば、かなへとよもふ、

11 はねないとり、つるないゆみとかゝれたは、さてこのこひ  
を、おもひそめ、たつもたゝれず、いるもいられぬとよも  
ふ、

小栗からの文に、例えば「岸打つ浪」とあるのを、照手姫が「くづ  
れて物や思ふらん」という工合に、解説する体になっている。一  
方、照手姫からの返事として、「ほそたにかはに、まるきはしの、  
そのしたてふみ、おちあふべきとかゝれたは、これは、たゞ一もん  
はしらずして、ひめ一人のりやうしやうとみえてあり、」という、  
準ずる解説の一例がみられる。次に、「延宝説経」には、「まず一  
ばんのふでだてに、みねに立。しか、うすもみぢ。ねざゝにあられ  
とかゝれし。」とあって、続いて、七種の「やまとことば」がみら  
れる。

12 みねに立しかとは。あきのしかではなけれ共、つまこひかぬ  
ると是をよむ。

13 ねざゝにあられとかゝれしは。さはらばおちよと是をよむ。

14 の中のしみづとかゝれしは、ひとりすませと是をよむ。

15 おきこぐ舟と召れしは、うかれ心にて、こがれて物や思ひ。

やるかたなきに。いそひで付よと是をよむ。

16 池のまこもと召れしは。ひくてになびけと是をよむ。

17 尺ながおびと召れしは。此こ思ひつめしより、立もたゝれずいるもいられず。心の内はもへ立叫と是をよむ。

18 ほそ谷川の丸木ばしと召れしは。此文申にとめ置な。おくへとをして文かへせ。文もどせ共。是をよむ。

「絵巻」と比較すると、省略化の傾向はみられるが、一致するものが五例。このうち17の「尺ながおび」は、解説の点で7と相違し、

11の「はねないとり」に、つるないゆみ」ととの間に混乱が生じていて、その解説がここに付いている。また、「絵巻」にはなく、新しく12・16の二種類がみられる。次に、「説経」では六種類がみられる。

19 みねにたつ鹿うすもみち。ねざゝにあられと書せしは、先立しかのたとへをば、秋の鹿にはあらねども。つま恋かめるとこれをよむ。

20 うす紅葉のたとへをば。いろにだすなとよむべきか。

21 ねざゝにあられとかゝれしは、花のたもとか。さはらばおちよと是をよむ。

22 池のまこもと召れしは。ひく手になびけと是をよむ。

23 尺長帯とめされしは。さて此恋かゝ。しゆみをへだてゝあればとて、いちごに一度はめぐりあひ。むすび。あはんとこれをよむ。

24 つるなき弓にはぬけ鳥。うずみ火とかゝれしは、此恋を。思ひそめにし此かたは、あるもあらず立にもたゝれず、我こ

ゝろもえたつばかりと。是をよむ。

21・23は、前二者に共通してみられたものであるが、24は「絵巻」のみに、そして19・22は「延宝説経」にのみ見られるものである。

新しく、20の「うす紅葉」が見られる。「奈良絵本」では、次のようである。

25 しやくなのおびとかゝれたは、これをなにとよむべきぞ、いつか此こひじやうじゆして、むすびあはふとよむべきか、

26 おきこぐふねとかゝれしは、いつかいそによらふずといふ事か、

27 のなかのすゝきとかゝれしは、いつかほにいで、なびきあはふといふ事か、

28 のなかのしみづとめされしは、此こひ人にしらせずに、ひとりすませとよむべきか、

「みなまでもよむまいよ」として、右の四種類がみられる。これは先の三者と同様に、小栗から照手姫に宛てたものであるが、この「奈良絵本」では、とくに照手姫からの返しとして、次の五種類がみられる。

29 われとそなたはかごのとり、であひかねてはなくばかり、30 しやくなのおびとめされしは、いつか此こひじやうじゆして、むすびあはんとさふらふか、

31 おきこぐふねとかゝれしは、いつかいそにつかんとや、

32 のなかのすゝきとかゝれしは、いつかほにいで、なびきあはんとの給ふか、

33 野中のしみづとかゝれしは、此こひ人にしらせずに、ひとりこゝろをすませとや、

このうち四種類は、小栗からの文と一致するが、29は他にみられない新しい種類である。ちなみに、四種のものはすでに出てきた種類であるが、27の「のなかのすゝき」は、「絵巻」にのみ見られたものである。だが、「絵巻」では「ふたもとすゝき」とあって、その点が多少相違する。以上を類似の詞章にしたがって整理すると、次のようである。

リ	チ	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	やまとことば	絵巻	説経正本 (延宝三)	説経正本 (佐渡)	奈良絵本
ふたもと薄	根笹に毬	尺長帯	塩屋の煙	岸打つ波	沖漕ぐ舟	野中の清水	軒の忍	細谷川の丸木橋		1	18		
9	8	7	6	5	4	3	2						
		17 解読は い鳥な	13		15	14							
		23	21										
27		25			26	28							
32		30			31	33							

又	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ
みつのお山	羽無い鳥に、弦無い弓	峯に立つ鹿	池の真菰	薄紅葉	籠の鳥
10	11	12	16	20	
					29

このように十五種類の「やまとことば」が、先行の小栗判官関係書にみられる。

田植歌の「やまとことば」は、右の四種の間係書の場合と同様に、照手姫が読んだり、小栗が読んだりする体裁で出てくる。そして、整理して十三種類の「やまとことば」がみられる。両者を比較すると、「五・七・五・七・五」という田植歌の形態がら、形式に制約のない関係書とは完全に一致するものはないわけであるが、類似の跡をたどることはできる。田植歌には、まず「小栗さん丈長帯と書くなれば 結びあおうとこれを読む」とも、「小栗さま尺長帯と書いたのは めぐりあうやとこれを読む」ともある。これは、先の四本の間係書すべてにみられ、固定性の深さが察しられる「イ」と類似する。「尺長帯」・「結びあおう」とある。「いつか、このこひじやうじゆして」・「さて此恋かく」。しゆみをへだてゝあればと

て、いちごに一度はめぐりあひ」といった文句はないが、骨子となる部分は同一であり、一致する。次に、「その文に小笹にあられと書いたのは あたれば落ちるとこれを読む」と、田植歌にはある。

「根笹」が「小笹」とはなっているが、これは「チ」と一致する。次に、田植歌には「小栗さん小池にかもめ（又は「なかも」）と書くなれば、引く手になびけとこれを読む」とある。「小池にかもめ・なかも」は、関係書では「池の真菰」で、この所に多少の相違はあるが、他は一致して、「ワ」との類似関係にあることは明白である。なお、田植歌には「小栗さま小笹に露と書いたのは 引くになびけとこれを読む」ともあるが、これは上部は「チ」、下部は「ワ」に該当するもので、両者が混じてでき上がったものの如くである。次に、「小栗さま丸形橋と書いたのは 踏みかやされなとこれを読む」と、田植歌にはある。「イ」の「細谷川の丸木橋」との間に類似関係があると考えられるが、下句が大きく相違しているのである。田植歌の場合は、例の「我が恋は細谷川のまる木橋ふみかへされて濡る袖かな」（平家物語・九）が、そのまま適用されている。以上、田植歌にみられる十三例の「やまとことば」中、五例にその脈絡をたどることができる。

「小栗判官」関係書以外にも、「やまとことば」の登場する作品がある。「やまとことば」そのものの研究書に、「ことは遊び辞典」（鈴木紫三氏編・東京堂）があるが、この「解説」中の「中世のやまとことば」の項には、「浄瑠璃十二段草子・横笛草子・さいき・小男草紙」の四作品が指摘されて、「やまとことば」の部分が摘出紹介されている。なかでも、このくだりの部分が「小栗判官」

のそれに近いものに「十二段草子」（日本歌謡集成五所収）があげられる。「九段やまとことば」の項にでてくるもので、類型中最も形態の整ったものである。

わが恋は物によく／＼たとふれば、信濃なる浅間の嶽の風情かや、筒井の水にもさも似たり、野中の清水のふぜいかや、繫がぬ駒にもたとへたり、弦なき弓にもたとへたり、根笹の上の霰かや、下はふ葛にもたとへたり、笛竹のふぜいかや、一むらすゝきの有様かや、細谷川の風情かや、打墨繩のたとへかや、ふたまた川のふぜいかや、清水坂にさも似たり、化粧の帯のふぜいかや、沖漕ぐふねにもたとへたり、那智のお山のふぜいかや、埋火のふぜいかや、濃き紅の風情かやとおほせける。

これは「御曹司」の文面であるが、これに対して「浄瑠璃姫」側は、次のように解説する。

(1) 浅間の嶽とさふらふは、もえ立つばかりの心かや、(2) 筒井の水のふぜいとは、やる方なきとのふぜいかや、(3) 野中の清水とさふらふは、かき分け参ると、仰せかや、(4) つながぬ駒とさふらふは、ぬしなき物とさふらふかや、(5) つるなき弓とさふらふは、引くにひかれぬたとへかや、(6) 根ざさの上の霰とは、引かばおちよの譬へかや、(7) 下這ふ葛のふぜいとは、もとは一つにて干々に心をくたくとかや、(8) 竹竹のふぜいとは、一よこめよとさふらふかや、(9) 一むらすゝきとさふらふは、只一ひきに懸けとかや、(10) 細谷川の風情とは、一度は落て一つになれとの仰せかや、(11) 打墨繩のふぜいとは、たゞ一筋に思ひきれとの心かや、(12) 二また川のふぜいとは、廻り逢へとの心かや、(13) 清水坂のふぜいとは、人め繁きのたとへかや、(14) 化粧の帯のふぜいと

は、むすび合へとの心かや、(10)沖こぐ舟とさふらふは、こがれて物を思ふとかや、(11)那智の御山のふぜいとは、申さは叶へとさふらふかや、(12)埋み火のふぜいとは、底にこがれて、上に烟のたつとかや、(13)濃きくれなるとさふらふは、色に出づると候かや。

このほかに、先の辞典には指摘されていないが、「寛文以前の古版」といわれる「しんとく丸」(徳川文芸類聚・八所収)には、「しんとく丸」が「おとひめ」に宛てた体で、次のようにでてる。

やまとことばと打みへて、みねにたつしかうすもみぢ、あきのしかではあらね共、つまこひかねると是をよむ、のなかにしみづとめされしは、此こい人にたごんすな、ひとりすませと是をよむ、はねなき取につるなきゆみ、うづむひとめされしは、たゞかりそめに思ひそめ、たつもたゞれずいるもいられず、心の内はもへたつばかりと是をよむ、いけのまこもとめされしは、ひくてになびげと是をよむ、ほそたに川のまるさばし、此ふみちうにとめおくな、をくへとをしふみかへせよと是をよむ、

「やまとことば」は「小栗判官」に限らず、中世の草子類に幅広くみられ、男女を結びつける上での一類型をなしていたことが知られる。四本の「小栗判官」関係書には求め得なかったが、田植歌の方には、「小栗さんふたまた川と書いたのは、流れあおうとこれを読む」・「その文にふたまた川と書いたのは、末落ちあおうとこれを読む」がある。これに対しては、先の「十二段草子」中の「ふたまた川のふぜいかや」——「二また川のふぜいとは、廻り逢へとの心かや」があげられる。田植歌の「流れあおう」・「末落ちあおう」が「十二段草子」では「廻り逢へ」となっていて、相違する点もある

が、脈絡はたどることができる。また、田植歌には「小栗さん袂に氷と書くなれば、しんとけあおうとこれを読む。(「しみとけあおう」「解かしあうや」ともある。)」とある。先の辞典の「解説」の項には「大和言葉と題する辞書は、近世の極く初期から徳川時代を通じて、実に数多く刊行されている。」といった考察があるが、その「大和言葉」の中に「たにのこほりとは、とけやらぬ事を云」とある。やはり、解説の点に相違はみられるが、脈絡をたどることはできる。

さて、田植歌にみられる「やまとことば」は、同題である「小栗判官」の最も古い四本の関係書の中に、すでにみられる。さらにまた、それらと同時期の他の作品の中にも出てくる。田植歌の「小栗さん大海々よと書くなれば、思ひが深いとこれを読む」・「小栗さん戸板にあられと書いたのは、ころびあおうとこれを読む」は求め得なかったが、他は、「小栗」の絵巻・説経・奈良絵本、ならびにその他の草子類に同種の詞章があつて、脈絡をたどることができた。田植歌の「やまとことば」は、伝承の性質がら、直接にそれらからのものを持続したとは言いきれないが、中世の面影を伝えていることは明らかである。

### 三

さて、照手姫からの返事を読んだ小栗は、姫のいる横山邸を訪れる。39・40・55・56は、みだてもせず横山長者の押し鞆となった小栗が、舅との対面で、鬼鹿毛馬に乗ることを所望され、茅野が原へと急ぐことを歌う。まず、みだてもせずに押し鞆となる部分は、「佐渡説経」によると、

とくくむこ入との御でうなり。いけの庄司承り、奥方は使者

を立ねばむこにとらぬと承る。某使者に参らんと有ければ。おくり聞召。おろかや庄司。我よこ山にむこにきはりやう事にてなし。使者には我か参らんに。何のしさいの有へきと。十人の殿はらをうちつれ。いかにあきひと、ろしの案内せよと仰ける。……。ほとなくゆけばさかみの圍に着給ふ。……。それよりおくり殿。いぬるにうつらせ給へは。時のはん衆は出あひ。是はとかわれは。是はいつも参るきやく成が。そんなぬかと、さしてもでもなく。いぬるにうつらせ。給ひける、いぬるになればてるて立出たいめんし。女ほう達の御しやくにて。御酒もりとぞ聞えける。此人々の御中。ひよくれんりの御ちきり、けに浅からすと聞えける。

とあり、他の三本もこれに準ずる。「奈良絵本」には、とくに、さてをくりとの、大かう一人の人は、たかふたをうちやふり、をしてうちへいりたまひ、いぬるのつほねにおいりあつてに、ときのこんくすきぬれは、しゆんのさかつききやくにまはり、うたふつまふつまめかれける

とあり、「をしてうちへいり」したことが表現されている。続く部分に対しては、やはり「佐渡説経」によると、  
時によこ山立出。めつらしのおくりとの。まつむこしうとのげんさんなれは。酒をさまくにもりながす。はや三ごんめといふ時に。よこ山の御説。何か都のきやくらいに。さかなを所望との給へは、おくり聞召、侍のけいならは、弓か鞆か包丁か。力わさかはやわざか。はんの上のなくさみか。仕らんと有ければ。時に三郎すゝみ出。いやくこはさやうの事はすかれす。若き時よりも馬をすかれ候。爰にふじさんのふもとより出

たる、あら馬を一定求め候。さかなに一ば、所望と申けり。おくり聞召。……。一ば、のらんと思召。……。馬屋をさしてそ急れける。……。きやくらいの召る、御馬は。こなたへと、八町のかや野をさしてそいそかる。

とあり、また他の個所に「あのかや原にたなき置せ給ふ鬼かげ」とあつて、他もこれに準ずるが、田植歌にある「茅野が原」が登場するのは、「佐渡説経」のみである。41は、小栗がほめると、鬼鹿毛が前ひざを折つて下馬をする。このところは、小栗が「せみやう」をふくめた時に「のせんといわぬ斗にて。前ひざ折てうやまふたは、只人間ものをしらぬなり。」と「佐渡説経」には出てくるが、この部分が該当する。続いて田植歌には「鬼鹿毛」に関する詞章が列挙されるが、これは、鬼鹿毛をほめる詞章と馬の曲乗りをいう詞章からなる。42・43・44が鬼鹿毛ほめの詞章であり、46・57・58が馬の曲乗りを歌う詞章である。この点について、まず前者は、「延宝説経」には、

おつさ、まむかふ、よこはたばり。ほねあひ、しゝなみ、よめのふし、つくり付たる如く也。口のかゝり見てあれば。うは口つつて下口たれて、たづのかしらの如く也。はなあらしのやうだい。ねん／＼へたるほらのかいを。二つ取ておし合。中よりぼたんを出す如く也。まなこはこんにくろくして、あが、ねの大すゞにめつきをさいて、あさひにむかふ如く也。みゝはちいそうわけ入て。ほけ経の五のまきを。二くはん取ておし合。物の上手に作り付たる如く也。しめのかみは山すげか。谷の風にもみもまれ、なびいた如く也。どうのほねはつくし弓の。上ばりがつるをうらみ。一そりそつたる如く也。をは山中の大た

きの。たぎりにたぎつてさつ／＼おつるが如く也。うしろのもは日本一のからのびわを。二めんおつ取作り付たる如く也。はらはまりをく／＼つた如く也。まへ足のようだい。大竹をねびきにして。ありとにふしをそろへ。ごばんの上に作り付たる如く也。

とある。この同じ部分について、「絵巻」には、

ひはら三すんに、しゝあまつて、さうのおもかに、しゝもな  
く、みゝちいさうわけいつて、八ちくの御きやうを二くわんと  
つて、きり／＼とまきすへたかことくなり、りやうかはんは、て  
る日月のとうみやうの、かゝやくかことくなり、ふきあらし  
は、千ねんへたるほらのかいを、ふたつあはせたことくなり、  
しめのかみのみことさよ、日ほん一の山すけをもとをそろへ  
て、ひとかまかつて、たにあらしにひとみもませ、ふはとな  
ひいたことくなり、とうのほねのやうたいは、つくしゆみのし  
やうはりかつるを、うらみ、ひとそり、そつたかことくなり、  
をはさんてうのたきのみつか、たきりにたきつて、たう／＼と  
おつるかことくなり、うしろのへつそくは、たうのしんとほん  
と、はらりとをとし、はんのうへに二めんならへたことくな  
り、まへあしのやうたいは、日ほん一のくろかねに、ありと  
に、ふしをすらせつ／＼、つくりつけたることくなり、

とあり、また「奈良絵本」には、

さてこのむまのりやうかはんは、らく月のことくなり、ふりかみ  
はあき八月のいねのほにいて、風にみたる／＼ことくなり、みゝ  
のやうすは、ほけきやうの八のまきをつくりつけたることくな  
り、さて四そくは、こはんのおもてにつくりつけたることくな

り、おのふりは、はる三月にしたれやなきかはにいて、風にむ  
かふかことくなり、

とある。引用冒頭の馬全体をいう部分はおいて、ほめる場所は、「延宝説経」では、「口」・「はなあらし」・「まなこ」・「みみ」・「しめのかみ」・「どうのほね」・「を」・「うしろのもも」・「まへ足」、「絵巻」では、「みみ」・「りやうかはん」・「ふきあらし」・「しめのかみ」・「とうのほね」・「を」・「うしろのへつそく」・「まへあし」、「奈良絵本」では、「りやうかはん」・「ふりかみ」・「みみ」・「四そく」・「を」である。田植歌にみられる「目」・「尾」は三者ともにみられ、「口」は「延宝説経」にみられる。細部においては、「尾」について、田植歌の「清水流と見える」に対して、「山中の大たきの。たぎりにたぎつてさつ／＼おつる」（延宝説経）・「さんてうのたきのみつか、たきりにたきつて、たう／＼とおつる」（絵巻）とあり、「目」については、「明星星と拝まれる」に対して「らく月」（奈良絵本）・「てる日月のとうみやう」（絵巻）とあって、その例えの部分においてもまた、類似の脈絡をたどることができる。この馬ぼめに続いて、45は横山長者の門口に馬を乗りかけて行くことを歌う。この点は「いそく心のほともなく、よこ山殿のひろにはにのりいれ給ふ」（奈良絵本）・「桜のばゝにのり入給へば」（延宝説経）が該当する。場所に多少の相違がみられるが、類似の跡は十分にたどることが出来る。次に、46・57・58、それに「カタオロシ」の一声は、馬の曲乗りに関するものであり、「屏風のふち乗り」・「碁盤の目ぬりにしようぎ乗り」・「梯子の右乗り左乗りに、立障子のくみこ乗り」である。この部分は「延宝説経」には、

しやうじ一間取出し。是へくとしやうじけり。君御らんじて。せうじの上のり上。ほねをもおらずかみをもやぶらず、はんじが間のり給ふ。……ごばん一めん取出し。是へくとしやうじける。ごばんの上のり上給ひ。はんじ斗のり給ふ。……のぼりはしご取出し。やばなにさしかけ。是へくとしやうじける。はしごのうへにとくくのり上給ひ、しゆてんのやばな、こなきのやばな。かけつかへしつりの給ひ。えんかうがこず糸をつたふごとく也

「奈良絵本」には、

かやうなるきよくのりこそは、それかしたる事とおほしめし、ひしよのむちをちやうとうち、十二このほりはしを、とくりくとのりあけて、いぬゐのつほねのやねのうへを、かけつかへいつのりまはし、まつさかさまにそのりおろし、なにかおこのみ候へ、三郎うけたまはつて、はりたてたるしやうしを二三まいとりいたし、ひろにはにさつとならへ、此うへをおのり候へ、をくりこのよしきこしめし、これもいとやすき事とおほしめし、しやうしのうへのりあけて、とくりくとのりあけて、かみをもやぶらすめされ、なにかおこのみ候へ三郎殿とありければ、こはんを一めんとりいたし、これへくといそいたり、いてのらはやとおほしめし、こはんのうへの四つのは、とくりくとのり給ひ、

とあるところが該当する。碁盤・梯子・障子など同一であり、また、46の「いとやすい」は「奈良絵本」の「いとやすき」と一致して、はからずも極めて細かな部分に類似の跡を指摘することができ。次に、鬼鹿毛駒でもって小栗を殺せなかつた横山は、次の手

段として毒殺をはかるのであるが、田植歌の47・48・59・60がそれである。即ち、小栗を毒殺する計画をたて、千畳敷にすわらせて、毒酒で殺害する。なお、60には照手姫の下流しも歌われている。この部分を「延宝説経」によってみると、

先ひろにはに、ほうらい山をかざり。うをとしかとをはなし、ほうらいの内に二糸のてうしをからくみ、おくり一門には。とくの酒。我らがのむ酒はかんろをつぎわけ、きのふの馬の御しんるうに、酒を一つと申なば。参らんはぢでう也。

という横山方の計略にかかつて、小栗は「扱よこ山に成ぬれば。大まくつかんで打上。ざしきをきつとみ給へは。ひだりざがあいて有。おめすおくせず、一どにはらりとなをられけり、」の如く参上し、毒酒を飲んで、「あしたのつゆときへ給ふ。」とある。60にについては、「姫君を夕さりのくれ程に。さがみ川鬼からが入うみに「折から入うみに」、しづめにかけよ」ということであつたが、兄弟のはからいで「ろうごしをつきなが」すこととどめられるが、この部分が該当する。

流された照手姫は、転々として、やがて「みのゝ国。大はかのしゆく。萬や長が所にかいと」められるのであるが、61・62・63は、いたはしくも照手姫は水汲みの仕事を命ぜられて、汲んだる清水でやつれ果てた我が身の姿をみることを歌っている。この部分は、「延宝説経」によると、

あらいたはしやひめ君は。おけとひしやくをかたにかけ。十八町あな大成、し水をくみに出給ふ。し水にも成ぬれば。おけとひしやくをからとすて、さぶとくみ、くんだるし水でかげみれ

〔はてたよ〕  
ば。なむ三ぼう、やつれはてよ我すがた、

とあり、該当する。この部分は、細部においても類似するもの多くを含んでいて、かかわりの深さをみてとることができる。さて、一方の小栗であるが、49・50・64・65・67・68、それに「ねり歌」の一声は、小栗が蘇生してもの小栗になるまでを歌っている。「延宝説経」によってみると、

(大王) おぐりのむな板に。此者をくまの本ぐうゆのみねへ入てたべ。こなたよりくすりのゆを出すべし。ふぢさはの上人へと。じひつに是をあそばし、ぜんさいなれと打せ給へば。うはのが原に出らるゝ……。上人御らんし。是はおぐりにうたかふ所なしと。御寺につれてかへらせ給ひて。車を作り。なをかきあみと付。むねに木ふだを付、此車を引者は。一引ひけば干ざうくやう。二ひき引ば万ぞうくやうとあそばし。車のだんなつかん迄、引て参れと仰ける。……。上下の人ゝ是をみて。おやのためとて引も有。つまのためとて引も有。……。爰にあはれをとどめしは、しもの水しててるての姫にてとゞめたり。しみつをくみ帰らるゝ。車を御らんじて。あはれ日かな三日ほしや。一日はつまのため。又一日は十人の殿原のために、車を引てゑさせたや。……(照手) 門外さして出給ふ、めづなおづなに取付て。ゑいさらゑいと引程に。長の門外引過て。しゆくや町やせきゝにて、引やゝ此車、をんどを取てひかしやうぞ。……。あらふしぎや此がきあみ。に。はなるゝは。つまのおぐりにはなれはも。何れ思ひは同じこと。あわれ身がな二つやれ。一つはみのかへり。よきに奉公申たや。一つは此がきあみを、くまの本ぐうのゆに入て、病へいゆう仕る。なれ

のはてが見たいよの。

とあり、かくて「程なくゆのみねに御出有て。「程なくゆのみねに付。かくてごんげんはあらはれ、ゆのみねに御出あつて。」おぐりをかいしやくし給ふ。一七日お入あれば。みゝ聞へめもみゆる。三七日と申には。本のおぐりと成給ふ。」ともある。こうした部分が該当するのであるが、やはり細部においても、かかわりの深いものがみられる。

#### 四

以上、田植歌謡「小栗判官」ナガレの詞章を紹介し、これら一連の歌謡が、はたして古い姿を投影したものであるか否かに視点をおき、現時点で最も古く、中世の面影を伝える「絵巻」・「説経正本」・「奈良絵本」などの「小栗判官」関係書との比較考察を行なってきた。いうまでもなくこの比較考察は、性格を異にした歌謡と物語との間で、その点での制約がある。この面を考慮して、右の作業の結果言うならば、筋の流れに変動はなく、また殆どの詞章に相通ずる部分の指摘が可能であり、十分なる脈絡をみてとることができ。その上に、極めて具体的な字句にわたっても、それのうかがえるものがある。先にも申し述べたことで、これら二者をそのまま結びつけることはできないが、中世の関係書の面影は、この田植歌に十分に汲みとることができ、それらを伝承していることは明らかである。

当稿は昭和四十三年八月、広島大学教育学部国語教育学会において口頭発表したものである。